

東西均開章訳稿

齊藤正高 訳

解題

『東西均』は方以智（一六一一—一六七一年）の著作である。『通雅』『物理小識』『菜地炮莊』などを代表とする彼の膨大な著作のうちでも、その思想を濃密に表現し、ひととき異彩をはなっている。序にあたる「東西均記」によれば一六五二ごろの成立である。

この時期は、明清交替の激動期にあたり、方以智の人生も転変をきわめた。彼は万曆三十九年、南直安慶府桐城県の名家にうまれた。幼年期は巡撫であった父の赴任地で暮らし、青春時代を金陵で過ごし、崇禎十三年、三十歳で進士となった。京師に来て、わずか四年後、崇禎十七年甲申、李自成が京師に入ると、崇禎帝は自尽し、ついで清が京師に入る。方以智は皇帝自尽のあと、東華門に崇禎帝を哭した者の一人で、李自成の軍にとらえられている。二十日ほど獄中に拘留されたが、脱出し逃

亡生活に入った。嶺南で放浪していた時期、南明政権とも一定の関係をもっていたが、永曆四年、清軍が桂林を攻めたときに、追跡を避けるため、剃髪して僧となった。翌年、梧州で病を得て「自祭文」を書き、甲申の年にすでに死んでいると述懐した。永曆六年、離散していた家族が集まった故郷に帰り、以後、明朝復興を思いながらも、著作の完成と講禪に生きた。この年、つまり南明永曆六年、清順治九年に「東西均記」を書いたのである。方以智はこの時、四十二歳であった。

現在、『東西均』のテキストは、安徽省博物館に保存されている。この抄本は弟子が筆録したものと考えられているが、そのなかには方以智の自筆とみられる書き込みをふくんでおり、圈点・断句も示されている。李学勤氏をはじめこの抄本を整理し、侯外廬氏が序文をよせ、一九六二年、『東西均』として中華書局から出版された。約四十年後、龐樸氏による最初の注

釈『東西均注釋』が二〇〇一年に刊行された。『東西均』は李学勤氏が顕彰する以前は完全に埋もれていたもので、その全面的研究はまだはじまったばかりである。

『東西均』の各篇は、「擴信」「反因」など二十八篇、問題別のテーマをめぐってかかれた長文で、その中には儒仏道の三教をまじえた思惟が展開されている。かつて、島田虔次氏は『東西均』を評して「難解の権化のごとき哲学エッセイ集」とのべ、区々たる儒学をこえた「中国の学」への「不幸なりし新機運の端緒」が確認できるとしている。

『東西均』のなかでも、「開章」は特殊な位置を占める。抄本では独立して一冊となっており、書き写した紙の産地も異なっている。序にあたる「東西均記」からはなれて一冊となっている点は、ほかの諸篇と成立時期がことなることを示している。語彙の面からいえば、書名にもなっている均字を多く用いる点が目撃されている。開章をのぞけば、均字の使用はわずか五字にすぎない。このため、李氏・龐氏ともに、ほかの篇が各論であるのに対し、「開章」を『東西均』全体の総論と考えている。方以智の積義によれば、「均」とは陶器をつくるロクロであり、また楽器の音を調律するモノコードである。つまり、目に見える形を調べ、目に見えない音を調律する道具である。この二重の意味は、さまざまに延伸され、「大成均」「混成均」「鄒均」「蒙均」「空均」といった、『東西均』のなかでもさらに特異な、「開章」独特の用語になっている。これらはそれぞれ、孔子・

老子・孟子・荘子・仏教など、中国の思想史を構成する重要な思想家・思想内容を指す。「開章」には固有名詞がほとんどなく、思想史上の重要な人物にさえ、均をつかた造語をあてている。これは、聖人の名に縛られないようにする工夫であろうが、同時に、方以智の思想史観をうつつしているように思われる。それは、さまざまな思想が、中国の土からロクロによって形づくられ、思想を表現する言葉が、均すなわち韻として、あたかも歴史の中で演奏される壮大な交響楽のように融合し、その交響楽の指揮者としてタクトをふるおうとしているのが自分であるのだというようなことがイメージされているように思われる。

以下に訳出を試みた「東西均開章」は、均の思想から構成された思想史論であり、この均の思想には、何より悟りの高踏に幻惑されず、いかなる偏執にも陥らない方以智一流の「自由」の精神が脈打っているのである。

参考文献

- 島田虔次『朱子学と陽明学』岩波新書、一九六七年
 任道斌『方以智年譜』安徽教育出版社、一九八三年
 羅熾『方以智評伝』南京大学出版社、一九九八年
 坂出祥伸『中国思想研究』関西大学出版部、一九九九年
 荒木見悟『憂国烈火禪』研文出版、二〇〇〇年

抄本の体裁

以下に、『東西均』の全容を示すため、龐樸氏による報告から、抄本の構成をまとめておく。抄本の大きさは、各冊、縦二十六センチ、横十五センチ、各帖、二十行、一行は三十字である。

第一冊 宣紙、題「密之先生 東西均」（密之は方以智の字）

【内容】東西均開章

第二冊 毛辺紙、題「密之先生 東西均上」

【内容】東西均記・擴信・三徵・盡心・反因・公符・顛倒・生死格・奇庸・全偏・神迹・譯諸名

第三冊 毛辺紙、題「密之先生 東西均下」

【内容】道藝・不立文字・張弛・象數・所以（附 聲氣不壞説）・容通・食力・名教・疑信・疑何疑・源流・無如何・茲黈燧・消息

翻訳の方針

- 一、原文は繁体字、翻訳は常用漢字を用いる。
- 二、底本は龐樸『東西均注釋』中華書局二〇〇一年を用い、『東西均』中華書局一九六二年も参照した。
- 三、底本の段落にしたがって番号を付けた。
- 四、難解な語句は独自に簡単な訳注をつけたが、龐樸氏が省いている部分はやや詳しく注をつけた。
- 五、方以智の書いた自注は（ ）で括った。

東西均開章

一

均者造瓦之具、旋轉者也。董江都曰泥之在均惟甄者之所爲。因之爲均平、爲均聲。樂有均鐘木、長七尺、繫絃、以均鐘大小清濁者、七調十二均、八十四調因之。（古均勻鈞鈞皆一字）均固合形聲兩端之物也、古呼均爲東西、至今猶然。（南齊豫章王巖傳止得東西一百、于事亦濟、則謂物爲東西）

【注釈】○董江都曰、『漢書』董仲舒傳○均平「辨其物而均平之」（『周禮』賈師）○均聲「是故樂之製器法度均聲、得之毫厘、失之千里」（『太平御覽』卷五百六十五所引『樂書』）○均鐘木、調律器・モノコード、この部分は『國語』周語下、景王問鍾律於伶州鳩韋昭注にある。○兩端、「我叩其兩端而竭焉」（『論語』子罕）○謂物爲東西、『通雅』卷之四十九諺原にも見える。

【翻訳】均とは瓦やまものを造る工具であり、回転するものである。董仲舒はかつて「粘土が均うつくろの上にあれば、ただ陶器職人のなすがままだ」といった。このロクロの意味によつて、「均平」という言葉になり、「均声」という言葉になる。音楽には「均鐘木」という工具がある。長さは七尺、弦をかけ、鐘の音階おとを均ととのえる。七調十二均、あわせて八十四調はこれによる。（古代の均・勻・鈞・均はみな一字である）。このように均はもともと形や声の両端を合わせる物であった。むかしは均を「東西」と呼び、

今にいたるまでなおそうである。(南齊豫章王疑伝に「ただ東西一百を得れば、事においてまた濟なさん」とあり、物のことを東西といっている)

二

兩間有兩苦心法、而東西合呼之爲道。道亦物也、物亦道也。物物而不物於物、莫變易不易於均矣。兩端中貫、舉一明三。所以爲均者、不落有無之公均也。何以均者、無攝有之隱均也。可以均者、有藏無之費均也。相奪互通、止有一實。即費是隱、存泯同時。

【注釈】○物物而不物於物(『莊子』山木) ○變易不易、『易』の三名、変易・不易・易簡から出ている。○費隱、「君子之道費而隱」(『中庸』)、朱熹の章句に「費用之廣也、隱體之微也」とある。

【翻訳】天地の間には両端に苦心するという法則があり、東西はこの両端を合わせて「道」とよぶ。道もまた物であり、物もまた道である。「物を物として物に物とされない」のなら、均から「変易」しようとして逸脱したり、均から「不易」であろうとして硬直したりしないのだ。両端とその中間から、均の三つの相を明らかにするなら、均をつくるもとは有無に落ちない。「公均」であり、均とえる本体は無が有をはらんだ「隱均」であり、均とえるべき対象は有が無をはらんだ「費均」である。この三つの「均」は、互いに通じあい、ただ一つの実体があるだけだ。

すなわち、費あらわれほんたいは隱ほんたいであり、存あると泯ほろぶは同時なのだ。

三

所以然生不得不然、而與之同處。於是乎不得有言、不得無言。而不妨言言即無言之言。故中土以易爲均、其道竝包而以卜筮之藝傳於世、又不甚其苦心。均罕言於雅言、使人自興自鑿自嚴自樂而自得之、以其可聞聞不可聞。吾言無所不說者亡矣。僅有魯而唯者、有多識而知其不可聞者。斯則東老呼天知我霹靂一聲之後也。

【注釈】○所以然、前節「費隱」の出典『中庸』の朱熹による章句には、「然其理之所以然、則隱而莫之見也、蓋可知可能者、道中之一事、及其至而聖人不知不能」とある。○言即無言之言、絶妙な言葉を指す。○雅言、「子所雅言、詩書執禮、皆雅言」(『論語』述而) ○吾言無所不說者、顔回を指す(『論語』先進) ○魯而唯者、曾參を指す。(『論語』先進及び里仁) ○多識而知其不可聞者、子貢を指す(『論語』衛靈公および公冶長)

【翻訳】道とは「そうであるわけ」であるが、この「そうであるわけ」は「そうでなければならぬ」を生み、これと同じところにいる。ここでは、言いきることも、言わないでいることもできないが、絶妙な言葉を言うのはかまわない。だから、中国では『易』を均として言っている。その道があわせ包まれ、卜筮の技芸によって世に伝えられ、両端による苦心をやわらげるのである。均はまれに「雅言」にあらわれている。それは人を奮起

させ、反省させ、戒め、楽しませ、深く自らを得させ、その聞こえるものによつて、「聞く可らざるもの」を聞かせてくれる。こここのところを本当に分かつていた、「吾が言において説よやくばざる所なき」者は早死にしてしまい、わずかに「魯にぶ」くて「唯はい」という者や、「多く識り」「その聞く可らざる者を知る」者がこのこつた。これがすなわち、東老こらしが「天、我を知る」とさげんだ雷鳴を聞いた後継者たちなのだ。

四

竹中之均明知無言、而何以言。因後世以不可聞者自誇其聞、嗶嗶譎譎、以傳爲市。故言其何言之行生者微之。土型乎。鐘木乎。豈得已哉。

【注釈】○無言、「予欲無言」(『論語』陽貨) ○竹中、龐樸注に「竹中に孔あり」とあり、孔子を指すとす。これに従う。

○何言之行生、「天何言哉、四時行、百物生」(『論語』陽貨)

【翻訳】竹中の均こうしには「無言」を知っていたことが明らかだ。ではなぜ言つたのだろうか。後世の人々が「聞く可らざるもの」について、自分が聞いたと誇り、うるさくいあい、その伝聞によつて市がたつので、「何をか言わんやの行われ生ずる」ものを言い、無言の大切さをにじませたのである。その教えは、ロクロが作り出した土の器だろうか。それとも調律を行う均鐘木だろうか。どちらであろうと、ああ、どうして言わないでいられたらうか。

五

萬古所師之師惟有輪尊。輪尊無對而輪於對中。見所爲因縁和合、成器而適用者、皆方老之所爲也。方老不自謂爲之而歸於無爲之尊、則方老率衆執事芸芸者、皆輪尊之所以爲也。

【注釈】○方老、龐樸氏は方以智の自称とする。しかし、氏自身も認めているように、深意がある。天円地方にしたがつて輪を円と考へ、輪尊を天、方老を地と解することもできる。反因篇に「有天地對待之天、有不可對待之天」とあり、又「真天統天地」とある。輪尊はこの真天にあたるものである。○芸芸、多いようす。

【翻訳】万古の昔から師のなかの師は、「輪尊」だけだ。「輪尊」には対となるものがなく、さまざまな対の中をめぐっている。一方、行為の因縁が和合するのを見て、器をつくり用にあてるのは、みな「方老」のはたらきである。「方老」は自らこれを為すといわず、無為の輪尊に自らの行為を帰す。それならば、方老が多くものを動かかし事を行うのは、すべて輪尊がもとになつているのだ。

六

代而錯者、莫均於東西赤白二丸。白本於赤、二而一也。赤者平起赤而高中白、白者能白、能黑而滿輪出地之時本赤、因其所行、錯成生死。明而暗、暗而明、晝夜之生死也。生明死魄、一

月之生死也。日一北而萬物生、日一南而萬物死、一歲之生死也。時在其中矣。呼吸之小生死、天地之大生死、猶是也。

【注釈】○代而錯、「譬如四時之錯行、如日月之代明」（『中庸』）、「錯猶迭也」（朱熹『中庸章句』）○赤白、日月を指す。この点は蔣国保『方以智哲学思想研究』安徽人民出版社一九八七年所収「東西均題意辨析」に詳しい。○生明死魄、月の満ち欠けを指す。「惟一月壬辰旁死魄」「厥四月哉生明」（『尚書』武成）

【翻訳】つぎつぎにうつりかわるもののうち、東西をめぐる赤白二丸より均つているものはない。白は赤に本づき、二でありながら一である。赤者は地平からのぼるときは赤く、高く中天にかかるときは白い。白者は白くも黒くもなるが、満輪がのぼる時は赤にもとづき赤い色をしている。この日月の運行によつて、生死がうつりかわる。明けては暮れ、暮れては明けるのが昼夜の生死であり、月が満ちては欠けるのがひと月の生死であり、夏になると万物が生じ、冬になると万物が死ぬの是一年の生死である。時はその中にある。呼吸の小さな生死から、天地の大きな生死まで、ちょうどこのように連続しているのだ。

七

東起而西收、東生而西殺。東西之分、相合而交至。東西一氣、尾銜而無首。以東西之輪、直南北之交、中五四破。觀象會心、則顯仁藏密而知大始矣。密者、輪尊傳無生法忍以藏知生之用者

也。昭昭本均如此。

【注釈】○中五、もと河図洛書の中心にある五の意味であり、『周易時論合編』密衍に詳細がある。中央は即ち吾の位置でもある。○顯仁藏密、「顯諸仁、藏諸用」、「聖人以此洗心、退藏於密」（『周易』繫辭上）○無生法忍、一切が空であるという事実を受けられること。「無生法忍是得此法忍觀一切世間空心無所著」（龍樹『大智度論』）○知生、「未知生、焉知死」（『論語』先進）

【翻訳】東に起り西に収まる。東に生まれ西に死ぬ。このような東西の分は、じつはたがいに融合している。東西は一氣であり、尾をくわえ首がない。東西の輪に南北の交をたてれば、「中心の五」である吾と、四方の方角ができる。かなたの天象をみて吾が心に会うなら、聖人が仁をあきらかにし密にかくした「大始」を知るだろう。密とは輪尊が「一切は空である」という悟りを伝え、それによつて「生を知る」ためのはたらきをやどしたものだ。あきらかな本均とは、このようなものだ。

八

歩之積移、猶有歲差。望後人之均之、則可不均東西所以代錯之故、聽步東步西者之積移而差乎。東均者曰知日則知夜矣。西均者曰日原於夜以夜知日。步東之差者、守所立之甲乙、時已推移、而不知變。步西之差者、不知說夜所以說日也、而習說夜之法、掃說日者、貪食而畏夜、形累而影迷。此輪尊生物之公差也。故生轉均之人、明此日統夜之無日夜。以復人人自有之輪尊、則

東西輪尊之宗一也。一即具二、主宗者用一化二、而二即眞一、謂之不二。吾道一以貫之與一陰一陽之謂道、三一者、一一也。何謂吾、何謂道、何謂一。曾疑始否、曾同異否。

【注釈】○吾道一以貫之（『論語』里仁）○一陰一陽之謂道（『周易』繫辭上）○疑始、もと『莊子』大宗師の言葉である。方以智の『通雅』卷之一は疑始という篇名になっており、古篆古音を論ずる。

【翻訳】天の星の動きを測るにも、なお歳差がある。後の人がこれを均えるさまを望めば、東西がうつりかわる根本から均えず、東から測る者と西から測る者、それぞれから星の動きを聴いて、けつきよくは誤っている。いったい、これでいいのだろうか。東から均える者は「日を知れば夜を知る」といい、西から均える者は「日は夜にもとづき、夜によって日を知る」という。東から測る者の誤りは、立つ所の甲乙を守り、時がすでに推移しても、変化を知らないことである。西から測る者の誤りは、夜を説くのが日を説くものになると知らず、夜を説く法をくりかえし、日を説くことをすて、必死に夜を畏れ、心身が疲れ迷うことである。これは「輪尊」が物を生んだときにできる公差である。だから、均を回転させる人が生まれると、「日が夜を統べている無日夜」を明らかにする。これによって、人人が自らもっている輪尊をとりもどせば、東と西の人は「輪尊」によって一つになる。その一は即ち二をそなえ、一を用いて二を変化させ、二がすなわち眞の一になる。これを「不二」とい

う。「吾が道は一を以て之を貫く」と「一陰一陽これ道と謂う」の、三つの「一」は、一つの「一」なのだ。何を「吾」といい、何を「道」といい、何を「一」というのか。その「一」は、いったい、はじめをあらわすのだろうか。それとも、ちがいをあらわすのだろうか。

九

開闢七萬七千年而有達巷之大成均。同時有混成均。後有鄒均尊大成。蒙均尊混成、而實以尊大成爲天宗也。其退虚而乘物、託不得已以養中者、東收之。堅忍而外之者、西專之。長生者、黃冠私祖之矣。千年而有乾毒之空均來。又千年而有壁雪之別均來。至宋而有濂洛關閩之獨均。獨均與別均、號爲專門性命均。而經論均猶之傳注均。惟大成明備、集允中之心均、而苦心善世、以學爲旋甄和聲之門。彌綸乎大一而用萬即一之一、知之樂之、眞天不息、而容天下。後分專門性命、專門事業、專門象數、專門考辨、專門文章、皆小均、而非全均也。

【注釈】○達巷、「大哉孔子、博學而無所成名」（『論語』子罕）○大成、「孔子之謂集大成」（『孟子』）○混成、「有物混成、先天地生」（『老子』第二十五章）○鄒均、「孟軻、騶人也」（『史記』孟子荀卿列伝）○蒙均、「莊子者、蒙人也」（『史記』老子韓非列伝）○天宗、「天宗、六宗之神」（『後漢書』祭祀志中、盧植注）○不得已以養中、「且夫乘物以遊心、託不得已以養中、至矣」（『莊子』人間世）○堅忍而外之、「吾又守之、七日而後能外物、

已外物矣、吾又守之、九日而後能外生、已外生矣」(『莊子』大宗師) ○乾毒、「汲冢作天竹、又作乾毒、即五印度也」(『通雅』卷之二十、姓名外國) ○壁雪、「達磨面壁、二祖立雪斷臂云、弟子心未安、云々」(『無門関』) ○濂洛關閩、それぞれ周濂溪、二程、張載、朱熹の故郷を指す。○經論均、仏典における経蔵・論蔵・律蔵の所謂「三蔵」のうち、經典とアビダルマなどの教義解釈を指す。○允中、「人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執厥中」(『尚書』大禹謨)

【翻訳】天地開闢より七万七千年たつて達巷の大成均「孔子」がでてきた。同時に混成均「老子」があった。その後、鄒均「孟子」は大成を尊び、蒙均「莊子」は混成を尊んだ。しかし、その実、蒙均「莊子」は大成「孔子」を天宗と尊んだのである。蒙均のうち、その「虚に退いて物に乗り」、「やむをえず中を養う」のは東がこれを取め、「堅忍にして物を外にする」のは西がこれに熱心だった。長生術は道士がひそかに開祖としている。千年たつて印度の空均「仏教」がやってきて、また千年たつて壁雪「達磨・二祖」の別均「禪」がおこった。宋になると濂「周濂溪」・洛「程顥・程頤」・関「張載」・閩「朱熹」の独均「理学」がおこった。独均と別均は「専門性命均」と呼ぶ。仏教の經論均は經学における伝注均のようだ。多くの均があるなかで、様々な教えを集めて、それが明らかで備わっているのは、「允」と「中」を集めた心均だけである。心均は世を善にするのに苦心し、学をロク口を回し音を調律するための門とした。

心均は大うちゅう一にあまねくゆきわたり、万即一の一をつかい、これを知り、これを楽しみ、天のように休みなく、天下をいれるものである。後に性命を専門にし、事業を専門にし、象数を専門にし、考辨を専門にし、文章を専門にするように分かれたのは、みな小均であり、全均ではない。

十

乾毒最能高深、苦心于世之膠溺、故大不得已而表之空之、交蘆雙破而性之、專明其無不可用大一之體、而用例頗畧、以世己有明備者故可畧也、而後人沿其偏上權救之法迹、多所迴避、遂成一流法迹之法、其實諦行之蟠死窟者、留以爲寒涼之風可耳、非中諦圓成者也。

【注釈】○交蘆「阿難由塵發知因根有相、相見無性同於交芦」(『大佛頂如來萬行首楞嚴經』) ○實諦、「佛言善男子、言實諦者名曰眞法」(曇無讖『大般涅槃經』聖行品第七之三)と本来、悟りのことであるが、ここでは天台智顥の三諦説における「中諦」の前段階、空諦・仮諦の面が強調されている。○中諦、「若隨四運運入涅槃、即空之觀、乘於隨乘運到眞諦、即假之觀、乘於得乘運到俗諦、即中之觀、乘於理乘運到中諦、三乘即一乘」(『宗鏡録』卷九十)

【翻訳】仏教は最も高く深く、世の執着に苦心した。だから、やむにやまれず、空を表わすのに、交えた葦が一方では立たないことになつて、その相互依存を存在の本性とし、自在につか

える大一うちゅうの本体を明らかにしようとした。だが、現実への用例がやや粗い。世にすでに明らかで備わっている教えがあつたので、はぶくことができたのである。しかし、後の人は、その万人むけでない、かりに救う法のとに沿い、現実を廻避し、ついに、法のとを追いかけるための法をつくりだした。その実諦ざとつを行うようすは、現実と交渉のない洞窟にとじこもり、そこを涼しげな風が吹く立派な境地だとみなしているだけなのだ。悟りを人生の現実に施そうとして、中諦にすすみ円成にいたつた者ではない。

十一

全均者曰、名教者寄聲託形之場也。時乗者太亟陰陽旬也。輪廻者消息也。迦延獄者名教場之杵也。心科榜于懸崖、則獨均之礪石也。又有安樂先天均、獨明輪率、則以元會徵成壞、固東西大生死之指南車也。

【注釈】○時乗「時乗六龍以御天」(『周易』乾象傳) ○迦延獄「二迦延典泥犁、二屈遵典刀山」(『法苑珠林』卷十二所引地獄經)、十八地獄の一つで、最初の地獄を指す。○安樂、北宋の邵雍を指す。○元會、邵雍『觀物内篇』第十篇によれば、一元は十二會、一會は三十運、一運は十二世、一世は三十年になる。一元は十二万九千六百年を指す。○成壞、「如是所説成住壞空、各二十中積成八十、總此八十成大劫量」(『俱舍論』卷第十二)、成壞は成住壞空の「四劫」のうち、宇宙の生成と崩壞の段階を

指す。

【翻訳】全均はいう。

「名教しめぎょうは声や形をあずける場であり、時乗ときは太極陰陽やぎがまの旬である。輪廻は消息せいしであり、地獄は名教の場で打ち下ろされる杵である。科挙にはない心の科目を絶壁にたてれば、独均の砥石である。また、安樂「邵雍」の先天均があり、ひとり宇宙の生成消滅の周期に明るく、「元會」によって、仏教の生成・崩壞の「四劫」を証明している。まことに東西大生死の指南車である。

十二

均備五行而中五音、所旋所和、皆非言可傳。空無所得、無不自得。久淬冰雪、激乎風霆、會乎蘇門、亘其神氣、自叩靈臺、十五年而得見輪尊。仰而觀、俯而察、小見大、大見小、無彼非此、即無大小、皆備于我矣。是爲大尊。成均空均與衆均之所以爲均、皆與我同其大小偏全、我皆得而旋之和之。生乎後時、躍身其前、開方圓目、穿卯酉光、讀五方本、破玄黃句、坐蒼蒼之陛。下視其不可聞之苦心、原何有不可推移之法、而况迹其迹乎。

【注釈】○五行、木火土金水の五つの説明原理○五音、宮商角徵羽の音階○淬、刀剣を鍛えるときに焼けた鉄を水にいられて冷ますこと。○蘇門、「籍嘗於蘇門山遇孫登、與商略終古及栖神導氣之術」(『晉書』阮籍傳)、河南省の山名で長生術を行った隠士が住む場所を指す。○叩靈臺、おそらくここは長生術の実

踐と関係がある。靈臺とは心のこと、『莊子』庚桑楚、郭象注にある。○仰而觀、「仰以觀於天文、俯以察於地理」(『周易』繫辭上) ○皆備于我、「萬物皆備於我矣、反身而誠、樂莫大焉」(『孟子』盡心上) ○成均空均、大成均つまり儒教と空均つまり仏教を指す。○卯酉、方向では東西を指す。

【翻訳】均は五行をそなえ五音にあたり、その回転するところ、調律するところ、どれも言葉では伝えられない。空はつかみどころがなく、無は自ら得られないからだ。久しく氷雪にきたえられ、風や雷にうたれ、はるばる蘇門山に隠士をたずね、その精神の気をめぐらし、自ら心をたたく、十五年にして輪尊を見ることが出来る。すると、どこを見ても、小に大を見、大に小を見て、あれがこれになり、大や小がなくなつて、万物がみな我に備わる。これが「大尊」である。大成均や空均や他の多くの均が均である所以は、みな我と大小・偏全を同じくし、ロク口をまわし、音を調律するからである。後の時代に生まれても、身その昔におどらせ、方円の目を開き、東西の光にあつて、五方の本をよみ、玄黄てんちの句をよめば、蒼天きざんの階きざしにすわる。そこから下界の「聞く可らざる」ものに苦心するようすを見下ろせば、そこにどうして推移しない法などあろう。ましてやその教えのあとを正しいあととできるものなどないのだ。

十三

匄則盡古今是匄也、獄則盡古今是獄也、因時變變、可全可偏、

必知其全、偏乃合權、讀之破之、空之實之、不則泥土以為擊耳、斷鐘木以為槪耳、旋形和聲之統迹者、衆均皆有口「其」書、而不立者立其所以統、吾以統均立、則兩間之星點枝梧者、皆不立之立也、

【附訳】口は虫損、李学勤氏に従い「其」を補う。以後同じ。

【注釈】○權、「權者反經而善也」(『孟子』離婁上、趙岐注) ○擊、まだ焼いていない粘土を指す。○槪、杭や棒を指す。○星點枝梧、ばらばらな様子やまがまを指す。

【翻訳】陰陽の匄やまがまであるこの世界は、古今を通じてかわらない。あの世である地獄も古今を通じてかわらない。時によって変化するのは、全ともなり偏ともなるが、その全を知つたならば必ず偏りが権に合う。多くの書物を読破し、空だ実だといつてみても、この全を知らなければ、ロク口のうえにのつた土をだめにし、均鐘木をたち割つて棒きれにしてしまう。形をまわし声を調和させる「総迹」が、多くの均にそれぞれ書物があるのに、教えを立てないのは、その統べる根本によつて立つていないからである。吾が統均によつて立てば、天地の間のばらばらなものは、みな立てない教えによつて立つのだ。

十四

用形之義詳於東、而託形之聲出於西。清淨音聞、誰耳順乎、絃歌杳矣。詩樂故事、孤頌雖行、且嗤滿半。獨均與別均之裔爭、而各裔又爭。獨均已不知呼天之聲、泥于理解、不能奇變、激發

縦横之曲、必讓塗毒之鼓。然別均守其專授、不加陶鑄、反呵宗教不二者葛藟、而發揮觀玩攫寧者爲芸人之田。曾不知模倣鏗空之伎倆、與穴紙雕蟲、同迷於耕織、何異乎、每笑高卑雖分、所依即迷、自絃撥之指點晴之筆、以至魯共之壁、靈山之花、皆迷藥也、而臯比座曲泉床、一據不可復舍、迷藥猶毒。

【注釈】○清淨音聞、「清淨音聞、感寂之微、通格異類、非道理所能」（『東西均』所以附聲氣不壞論）○弦歌、「子之武城、聞弦歌之聲、夫子完爾而笑曰、割鷄焉用牛刀」（『論語』陽貨）○塗毒之鼓、この語は『臨濟宗旨』に出ており、聞く者を殺す。○觀玩、絵画などを鑑賞すること。○攫寧、「其爲物、無不將也、無不迎也、無不毀也、無不成也、其名爲攫寧」（『莊子』大宗師）○芸人之田、「人病舍其田而芸人之田」（『孟子』盡心下）、趙岐注「芸治也」○弦撥之指、「孺悲欲見孔子、孔子辭以疾、將命者出、取瑟而歌、使之聞之」（『論語』陽貨）孺悲にどんな罪があつて追いかえされたのかは古來謎である。おそらくこれを言うのである。○點晴之筆、「金陵安樂寺四白龍不點眼睛、每云、點晴即飛去」（張彥遠『歷代名画記』）○魯共之壁、「武帝末、魯共王壞孔子宅、欲以廣其宮、而得古文尚書及禮記、論語、孝經凡數十篇、皆古字也」（『漢書』藝文志）○靈山之花、「世尊在靈山會上、拈花示衆、是時衆皆默然、唯迦葉尊者破顏微笑」（『五燈會元』卷一釋迦牟尼佛）、禪宗の不立文字に關係する。○臯比座、「勇撤皋比、說講易事」（『朱子語錄』卷一百五、六君子贊）虎の皮で作った席のこと、理学を指す。○曲泉床、僧

が説法の時に用いる椅子を指す。

【翻訳】形をつかう義は東から詳しくなつて、形にあずける声は西から出てきた。いまだき清らかな音楽に、誰が「耳順う」のか。弦歌の故事ははるかかなたである。詩樂や故事で、立派な人物をひとりたたえても、笑うものばかりだ。独均と別均のあとつぎは争い、それぞれのあとつぎも又争つた。独均はすでに天にさけんだ声を知らず、理解にこだわり、自由に変化する事ができない。はげしく弦を鳴らして縦横無尽の曲をはじめくが、必ず毒をぬつた鼓にかきけされるのだ。いつぼう、別均はその師からの伝授をまもり、陶鑄を加えず、かえつて宗教の「不二」を心をしぼるツル草とわらいとばし、無責任な態度で、「人の田の草を刈る」のだ。別均は文字を立てることを迷いとするが、書や文を作ることと、耕し織ることとで悟ろうとするのと、どちらも同じ迷いであると、どうして分らないのか。悟りは高く迷いは卑しいと、笑うたびに分別を設けるが、その分別がよつている所が即ち迷いなのだ。絃をはじいた指、睛をいれた筆から、魯の共王がこわした壁、釈尊が靈山で折つた花にいたるまで、みな迷い葉である。まして理学の師が座る虎皮の席や、禪僧が座る曲りくねつた椅子は、一度座るともうすてられない。迷い葉のうち、もつとも毒あるものだ。」

十五

方老向輪尊曰、迷而悟悟而迷、又何異呼而吸、吸而呼哉。矜

高傲卑、幾時平浪、吾無以均之、惟勸人學均以爲饗飧。衆藝五明、皆樓閣也、蟲吟巷語、皆棒喝也。其自誇無事人、惟恐齒及學者、以無忌憚而弄泥倚木、又偷安又斥人、狡矣。汝誠如蒼蒼者、吾豈不許汝斥好學爲惡習邪。蒼蒼之均也、各各不相知、各各不相到、則蒼蒼亦不能自主。而爲汝作主斥好學者耶。嗟乎、全均者苦矣、愚矣。

【注釈】○方老向輪尊曰、方老の言葉を十七の終わり「輪尊笑曰」の前までだと考える。○平浪、「隨時因物乃平浪」(『莊子』外物、郭象注) ○五明、「二内明、二因明、三聲明、四醫明、五巧明、菩薩學此五明總意爲求一切種智」(『大乘莊嚴經論』卷第五) ○弄泥、「師曰、汝欲識半人所在麼、也祇是弄泥團漢」(『五燈會元』卷八)、弄泥團漢とはぐずぐずして悟りを得られぬ者のこと。○倚木、「倚木於樹、苦覆其上而居焉、亦無壁障」(『晉書』隱逸傳 郭文)

【翻訳】「方老」は「輪尊」に向かっている。

「迷つては悟り、悟つては迷う。さて、吐いて吸い、吸つて吐くのと、どこがちがうのでしょうか。悟りが高いとほこり、迷いが卑しいとおごつていけば、いつ平靜になるのですか。吾はこれを均としない。ただ人には朝晩の飯を食うようにせつせと均を学べとすすめるだけです。六芸をはじめとする多くの技芸や、印度の五因明は、高みに登るための楼閣でしょうが、虫のうたや巷の語りも、みな棒や喝なのです。事なきを自ら誇る人は、ただ「学」が口のにのぼることを恐れ、すきかかってに悟り

を弄び、隠者ぶつて、自分は安逸をぬすみながら、人を指さしそしつて、狡猾です。あなたがほんとうに蒼天のように公明正大なら、吾はあなたが好学をしりぞけ悪習ときめつけても、どうして許さないでしょう。だが、蒼天のように公明な均でも、だれも知らず、だれも聞きにこないなら、蒼天もみなの主となれず、あなたのためだけに主となつて、学を好むことをしりぞける者となるのではないですか。ああ、全均とはなんと苦しく、愚かなのでしょうか。

十六

吾勸別均、別均方獨尊、而所迷者悅而從之。誰肯虚心、自知無住。既諱其住、必且訾我以掩悅者。吾勸獨均、獨均又以爲雜取異術、推而擯之、勤其悟後自強不息、薪傳用光、礙俱無礙。徵以自勤、則以五方本玄黃句、是更畏難護痛、引濁智割泥以自封、藉露布爲障面、詎知根本差別外内何分。清智和濁智中、知其起處、即任爲「官」、金剛刀何處不可用乎。反不如達者任之、蜉蝣慶喜、有何生死、何不逍遙、而爲聖人所縛定哉、果得策矣。然又烏知愚苦即逍遙之無上策耶。木榻一鐸、鐵門一拂也。己而已而、知有己耳、求免則那。雖然、本自如此、乃本自不可言者也。知必不免、而必言可免、是爲大免。勸縱不受、又豈可以不勸自暴「棄」哉。

【注釈】○露布、封をしない通信文で主に戦勝報告を指す(『通雅』卷三十一器用)。○薪傳用光、禪家の教えは所謂「以心伝心」

で、薪が燃えうつるように、師から直接弟子へ伝えられる。ここでは理学についていっており、薪が出す光によつて教えが伝わるという譬喩を述べ、理学の門戸が広いことを言っているのである。○木榻一鐸、木榻は禅家の雲水が寝る場所、鐸は木鐸で儒を指す。○鐵門一拂、鐵門は仏教、拂は玄学を指す。○已而已而、(『論語』微子)

【翻訳】吾が別均をすすめるのは、別均が独尊にならない、迷う者がよるこんで従うからです。誰がわざわざ心を虚にし、みずから執着なき境地を知ろうとするでしょう。その執着を忌み嫌うなら、きつと我執をにくんで悦楽をおさえこむはずです。吾が独均をすすめるのは、独均が異なる術をいろいろと取り込んで、だめなもの推しはかつてしりぞけるからです。悟った後にも努力をやめず、教えを伝えるのに誰もが見ることのできる光を用い、頑固であるように頑固でない面もあり、証をもとめて自ら考えるからです。それなのに、五方の本・玄黄の句など様々な書物をつかつて、いらぬ非難をおそれ、濁った智恵で泥をおとそうとして、かえつて自らを封じこめ、戦いに勝つたという知らせによつて目をふさいでしまうのです。これでは教えの根本的なちがいがどこで分かれるか知っていると見えましか。清らかな智恵で濁った智恵をやらわらげ、このちがいが始まる所を知つたなら、任じられて役人となつても、金剛刀すゐとうがどこにもはたらかないなどということがありましようか。そうでなければ、かえつて世慣れた達者を任命したほうがいいので

す。蜉蝣かぶらうは暮れまで生きられたことを喜びますが、それにどんな生死の迷いがありましよう。どうして逍遙じょうようになれず聖人に縛りつけられているのでしょうか。これははたして得策でしょうか。でなければ、愚かさや苦しみがそのまま逍遙じょうようであるという無上の策を知らないのでしょうか。木鐸で修行者を起こそうとし、寺の鉄門の前で俗塵を払うことを説くことには、やめてしまえ、免れてみよといつてみます。とはいつても、本来そうであるのは、本来言えない者なのです。きつと免れないだろうと知つて、きつと免れると言うのは「大免」のためです。この勧めがたとえ受けいれられなくても、どうして自暴自棄の人にすすめずにいられましようか。

十七

紛華隊之言性命均者、苦事淹洽。苟焉托立地火爐之傍、足唾人間之哲匠、以爲顔色、藏身已耳、不則交賒福田、久而自護、又多厭常喜新、因而別路給之、則果不信土木之皆均質也、城郭川原之皆均宅也、指遠山之青又青、有祕在焉、則馳千里馬遍九州而尋之。青又青何可得乎。猶必以土木城郭川原之非究竟也。豈非白癡、忽告之曰、君求青又青耶、君足下之土木是矣。彼反不信、學道賢者往往皆然、真可憐生、迷死而已。所最太息者、單襲田本自種之一吼、而廢禁種田之良勸。漫曰鼈難逃龜、其如日下狼臠何哉。輪尊笑曰、迷死而已、本不出吾計也。

【注釈】○紛華隊、「孟康曰、積聚脩飾、爲此紛華也」(『漢書』

禮樂志) ○藏身、「政者君之所以藏身也」(『禮記』禮運)

【翻訳】華奢な人々が集まって性命均について語ると、恨みつらみがしみこんで、その場の雰囲気にかかせて、世間の哲人偉人は唾をはくに足ると、ばかにしておいて、お互い顔色をつくり、自分たちの修養はやめています。でなければ、せつせと供養施捨をして福田を買い、ながく自らをまもろうと必死です。また常識をきらつて新奇を喜び、新たに聞いた話を、別の路で人に話してあざむくといった具合です。そうなると、土木がはたしてどこでも均し質であり、城郭や川原がみな均し宅であるとは信じないのです。遠い山の「青また青」をゆびさして、秘密がそこにあると思ひ、千里の馬にのつて九州をあまねくまわり、「青又た青」はどこで得られるのか、とたずねます。それでも、土木・城郭・川原がきつと究極ではないと思つているのです。ああアホではないでしょうか。ふいに、「君は青又た青を求めているのか。君の足下の土木がそれだ」と告げてやつても、彼はかえつて信じないのです。道を学ぶ賢者は往往にしてみなこうです。真に憐れむべきで、迷いのうちに死ぬだけでしょう。だが、最もため息がでる連中は、「田にはもともと種がある」という誰かのひと吼えを信じて、「田にうえよ」という昔からの良い勧めをやめて、「スッポンはなまじ甲羅があるから、甕の中には逃げにくい」などと、まるで昼間に狼が遠吠えするようです。いつたいどうしたものでしょう。」

輪尊は笑つていう。

「迷いのうちに死ぬだけだ。もとより吾が計より出ない」と。

十八

毒均設爐、聽人投迷。有開目放光者、則出而逍遙。不能出、則迷死之已耳。無明即明、爭明逾迷。躍冶之悟、大悟大迷。黔羸造命、本無迷悟、而有似乎生迷死悟。不迷則死、不如迷學、學固輪尊毒藥之毒也。

【注釈】○無明、迷いのこと。○躍冶、「今大冶鑄金、金踊躍曰、我且必為莫邪、大冶必以為不祥之金」(『莊子』大宗師) ○黔羸、「召黔羸而見之兮」(『楚辭』遠遊)、造化の神を指す。

【翻訳】このように、輪尊の毒均は炉をしつらえ、聴く者は迷いに投げこまれる。光を放つ目があれば、迷いから出て逍遙になるが、出られなければ迷いのうちに死んでしまう。無明が即ち明なのに、明を争つていよいよ迷う。悟つてやろうというような「躍冶」の悟りは、大悟であり大迷なのだ。造化の神、黔羸が人の運命を造るときには、もともと迷う運命の人も、悟る運命の人もない。ただ生が迷いで死が悟りに似ているだけだ。迷わなければ死ぬのなら、学に迷うほうがいい。学はまことに輪尊が飲ませる毒薬中の毒薬なのだ。

十九

吾告稗販毒藥者曰、至賤如鹽水、至穢如矢溺、皆可吐下、比於靈丹、何必外國之阿魏黃紈乎、燈籠露柱、石牛木馬、乃遼之

白臍也、土苴矣、疑者嚼即棄之、故爲畫長安圖、使人出門西向而笑、一肯上路、鞭策有分、津關相待、旅次盤桓、見則立見、不見豈患別無點心燐燐哉、世無非病、病亦是藥、以藥治藥、豈能無病、犯病合治藥之藥、誠非得已、

【注釈】○阿魏・黃硃、どちらも吐瀉の効能のある薬で大変めずらしい。それぞれ、李時珍『本草綱目』卷三十四・卷十一を参照。○燈籠、「仰山問、如何是祖師西來意、師指燈籠曰、大好燈籠、仰曰、莫祇這便是麼、師曰、這箇是甚麼、仰曰、大好燈籠」(『五燈會元』潭州瀉山靈祐禪師)○露柱、「僧問、見色便見心、露柱是色、如何是心、師曰、幸然未會、且莫詐明頭」(『五燈會元』撫州龍濟紹修禪師)○石牛、「蜀王本紀曰、秦惠王欲伐蜀、乃刻五石牛、置金其後、蜀人見之、以爲牛能大便、金牛下有養卒、以爲此天牛也、云云、後遣丞相張儀等、隨石牛道伐蜀」(『藝文類聚』卷九十四牛)○木馬、「始欲騎馬、未習其事、愈靈韻爲作木馬、人在其中、行動進退、隨意所適、其後遂爲善騎」(『南史』廢帝東昏侯)○遼之白臍、「往時遼東有豕、生子白頭、異而獻之、行至河東、見羣豕皆白、懷慙而還」(『後漢書』朱浮傳)○土苴、「道之真以治身、其緒餘以爲國家、其土苴以治天下」(『莊子』讓王)○出門西向而笑、「關東鄙語曰、人聞長安樂則出門西向而笑、知肉味美則對屠門而大嚼」(桓譚『新論』祛蔽)○盤桓、遅いさま

【翻訳】吾は毒薬を売り歩く者に告げる。いたって安い塩水でも、いたって汚いクソや小便でも、病人を吐きもどさせ、その

効能は靈丹にならぶ。何で外国の阿魏や黄硃が必要なのか。燈籠や露柱の禪問答も、石牛や木馬の智慧も、つまり、「遼の白臍」だ。売る方は貴重だと思っているが、実はくだらないのだ。くだらないものに見えて実は天下を治めることができる「土苴」でさえ、疑う者がかめばすぐにはきすててしまふ。だから、はるか西の長安の絵を画くには、「人を門から出し西に向かつて笑わせる」のだ。長安を見ようとして、わざわざ出発すると、皮のムチや竹のムチをつかいわけ、渡しや関門で待たされ、旅の宿は遅々としてすまない。大事なものは、見ればたちどころに見えるのだ。見えないからといって、どうして別に点心や菓子がないと心配するのか。世に病でないものがないなら、病もまた薬である。薬によつて薬を治しているなら、どうして病をなくすことなどできよう。病をおして薬を治す薬を調合するの、まことにやむをえないのだ。

二十

貫泯隨之微乎交輪幾也。所以反覆圓、圖書也。是全均所露洩之本、熟讀而破句者也、立而不立者也。雖言之而不言者自在、可聞而不可聞者自在。大尊囑此以作均徵而救衆均、又何暇避刹旛之禁忌、而故錮人於籠侗乎。風稜水文、貌在言外、不知言先一句、吾言又錮人矣。影響之曰、此皆不親切之皮相玩物也。此皆知見聰明之土塊木屑也。向上別有牢關一片瓢在。形笑之曰、不過爲日觀峰下灰堆出氣、慰沼納樸相望耳。自首自掃、一狀領

過、過後張弓、有何交涉。

【注釈】○貫泯隨、この部分を専門に論じたのが『東西均』三微である。○圓い、「圓い之上統左右而交輪之」（『東西均』三微）、い、はもと梵語の「イ」を指す。圓いはこの三点の間を円で結び、円融相即をあらわす。○皮相玩物、言葉のあそび○向上、禪家で悟りをえること。○一片瓢、「問、如何是善知識所爲底心、師曰、十字街頭一片磚、曰、如何是十字街頭一片磚、師曰、不知、曰、既不知、却恁麼說、師曰、無人踏著」（『五燈會元』舒州三祖山法宗禪師）○日觀峰、「應劭漢官儀曰、太山東南、名曰日觀、日觀者、雞鳴時見日」（『藝文類聚』第一卷天部上日）○沼納樸、沼納樸兒、其國在榜葛刺之西、或言即中印度、古所稱佛國也」（『明史』列傳 外國七）○一狀領過、「師顧昌曰、這公案作麼生、昌曰、潭州紙貴、一狀領過」（『五燈會元』潭州北禪智賢禪師）○過後張弓、「僧問、百丈卷席、意旨如何、師曰、賊過後張弓」（『五燈會元』台州萬年心聞曇貫禪師）【翻訳】貫「大小の生死を貫く存在」・泯「ほろぶ」・隨「生まれる」は、交「対立」・輪「循環」・幾「変化」のうちにあらわれる。これらがくり返す根本をあらわした円いのは、全均がもれでもとである。熟読して破りするものであり、立てて立たないものだ。言おうとして言えないもの、聞こうとして聞こえないものも、言葉とは関係なくおのずから存在する。「天尊」はこれにたのんで均の微を作り衆均を救う。寺のしきたりや避け、わざわざ人を曖昧朦朧のうちにとじこめている暇など

あろうか。風にも稜があり水にも文があり、貌は言外にある。言の先にあるこの一句を知らないと、吾の言葉はさらに人にとじこめる。影はこれをそしって、「それはみな無責任な言葉の遊びで、知見聡明の残りカスだ。悟りをえるには別に、関所があり、そこには誰もふまないレンガがおいてある」という。形はこれを笑って「日觀峰の下に灰がつもつてモヤがでているため、沼納樸を望んでなぐさめているにすぎぬ」という。みずから言葉を掲げ、みずから捨てるのだ。「一枚もらおう」という禅問答や「賊が去つて弓を張る」という禅問答も、何の役に立とうか。

二十一

細視大者不盡、大視細者不精、此誠然矣、然天地何以大者盡而細者精、豈非以不視者均之歟、請容東西之遮奪互闢、而即爲東西合拍解調曰、西言一切法皆是法、何能推新均出那伽大定之外、東均之贊曰、代明錯行、不收我、何以爲代錯、足蹶者思也、而用者大地、何不試學此均、以爲無用之用耶。

【注釈】○細視大者、「北海若曰、夫自細視大者不盡、自大視細者不明、夫精、小之微也、埤、大之殷也、故異便」（『莊子』秋水）○那伽、「摩訶那伽、大論云、那伽或名龍、或名象、是五千阿羅漢、諸羅漢中最大力」（『翻譯名義集』卷一）○用者大地、「故足之於地也踐、雖踐恃其所不蹶而後善博也」（『莊子』徐無鬼）【翻訳】「細かく大きなものを視るものは尽くさず、大きく細か

なものを視る者はくわしからず」というが、これは誠にそうである。では、天地はどうやって大きなものを尽くし、細かなものをくわしくするのか。みえないものによってこれを均^{とよ}えてい
るはずではないのか。東西の障害をとりはらおうとねがい、東と西から仲裁してみよう。西の均は「一切の法はみな法である」と言うが、それでは、どうやって新たな均を推し、このゆるがぬ定めから出られるのか。東の均の賛には「つぎつぎとめぐりうつりかわる」というが、そこに我がいないなら、いったい何をめぐるのか。「足がふむのは、八寸にすぎないが、用いるのは大地」なのだ。どうしてためしにこの均を学び、無用の用としないのだろうか。

二十二

有大全、有小全。専門之偏、以求精也、精偏者小全。今不精而偏、必執黑路勝白路、而曾知黑白之因於大白乎。入險則出奇、愈險則愈奇、而究竟無逃於庸也。惟全者能容偏、惟大全者能容小全、而專必厭全、小全必厭大全、大全隨人之不見是、而專者摧人以自尊、大全因物以作法、法行而無功、天下皆其功、而各不相知、專者必自露得法、而不容一法在己之上、以故聞者屈於其迅利、遂以爲大全誠讓專偏一等矣。

【注釈】○黒路白路、黒は邪道、白は正道を指す。

【翻訳】大全があれば、小全もある。専門の偏りは、くわしさを求めるからである。くわしいが偏っているのは小全である。

だが、今はくわしくもないのに偏り、必ず黒路^{じやくろ}によって白路^{せいどう}に勝とうとする。ああ、黒と白が大白によっていることを知っているのか。険しいところに入れば奇策をだし、険しければますます奇策を出す。しかし結局、庸^{あたりまえ}からは逃れられないのだ。ただ全のみが偏をいれ、ただ大全のみが小全をいれる。そして専なるものは必ず全をきらい、小全は必ず大全をきらう。大全は人々から正しいとされたいものにしたがうが、専なるものは人をくじいて自らを尊ぶ。大全は物によって法を作り、法が行われると功はないかのようにだ。天下は皆その功をうけていながら、そうだとは知らない。だが専なるものは必ず自ら法を得たことを露わにし、一法も己の上にあることをゆるさない。わざわざ道を聞いたとして、専なるものもつ利点に屈服させ、ついに大全が専偏に一等をゆずるようにさせるのだ。

二十三

集也者正集古今之迅利、而代錯以爲激揚也、何妨露洩之而又訾笑之、擔荷之而又容置之、謂不精、則讓諸公精、謂不能勝人、則讓諸公勝、謂習氣未除、是誠左旋習氣未除也、謂獨非迷乎、是誠迷于發憤之樂也、在非劫中、且均此十三萬年之曆、與之曰新、聽其迷明、容其勝厭、雖愚苦其心而尚有不能言者、庸何傷哉

【注釈】○十三萬年之曆、邵雍の一元をあらわす。○左旋習氣、左旋は天の動きのこと、仏教用語で習氣は習慣の力のこと、「謂

人學天、人謂之外、今謂人自學心、心即天也、天亦自學、天不學則何以日日左旋、老不歇心邪、母乃老天之習未除邪」(方以智『東西均』奇庸)

【翻訳】集なるものは正しく古今の教えの利点を集め、めぐらしてぶつけあう。何でもここから漏れていながら、そして笑い、これを担っているながら、置きざりにしてよいのだろうか。集なるものが、くわしくないというなら、これを「公精」にゆずる。人に勝てないというなら、これを「公勝」にゆずる。習慣の力がまだとり除かれていないというなら、まことに天の左回りに由来する習気がなくならないからなのだ。たとえ集なるものが迷いであろうと、それでは、独なるものは迷いではないのか。集なるものは困難ではあるが、まことに発憤の楽しみに迷っているのだ。この劫の中にあつて、かつ、この十三万年の曆を均え、これと日に新たに成り、その迷いと明をきき、その勝つと厭うとをうけいれ、愚かにもその心を苦しめ、なお言いえないものが残ろうと、ああ、どうしてかなしむだろう。

二十四

我以十二折半爲爐、七十二爲鞴、三百六十五爲課簿、環萬八百爲公案、金剛智爲昆吾斧、劈衆均以爲薪、以毋自欺爲空中之火、逢場烹飪、煮材適用、應供而化出、東西互濟、反因對治、而坐收無爲之治、無我無無我、圓三化四、不居一名、可以陶五色之素器、燒節樂之大燠、可以應無商之圓鍾、變無徵之四旦、

造象無定、聲飲歸元、知文殊中無中邊之中、又不礙常用子華庭皇之中、是名全均、是名無均、是名真均、有建金石華藏之殿、而健曠古當前之鐘者乎、必知問此造具均和調均之合一手矣、印泥印水印空、三印且破、又何嫌於刻削乎、存泯同時、各不相壞、形既無形、聲亦無聲、何不可乎遊形而戲聲。

【注釈】○公案、禪問答のこと○毋自欺、「所謂誠其意者、毋自欺也」(『大學』)○空中之火、『物理小識』卷之二に「空中取火法」があり、レンズや鏡による発火が記されている。○反因、「吾嘗言天地間之至理、凡相因者皆極相反、何其顛倒古今而臆說乎、此非我之臆、天地之臆也、佛言三因、得此反因、衡對八觚皆明矣」(方以智『東西均』反因)○聲飲、「安可齶舌絨脣、吞聲飲氣、惡呻吟之響、忍酸辛之酷哉」(『北史』儒林傳王孝籍)○無中邊之中、「文殊頌云、無色無形相、無根無住處、不生不滅故、敬禮無所觀、又頌云、虚空無中邊、諸佛心亦然」(『宗鏡錄』第十七)○子華庭皇之中、「天且不可以盡、而況於人乎、是故誠能由於中矣、一左一右、雖不及於中也、而在中之皇、及小人好盡、則遠於中矣」(『子華子』執中)○三印、「一印印空、日月星辰列下風、一印印泥、頭頭物物顯真機、一印印水、振轉魚龍頭作尾、三印分明體一同」(『五燈會元』衡州開福崇哲禪師)【翻訳】わたしは半年で入れ替わる陰陽を炉にし、七十二候をフイゴとし、三百六十五日を帳面とし、ひとめぐりの一万八百年を禪問答とし、金剛智をよく切れる斧とし、衆くの均をきつて薪にし、「自ら欺くなかれ」を空中の火とし、場にあわせて

料理し、材料を煮て用にあて、宴席に応じて出す。東西を互いに渡し、たがいに反対でありながらたがいに原因となるものを治め、座して無為の治をいれ、我もなく無我もなく、三をめぐらし四を化し、一名にいない。五色の素器をつくり、音楽を質素にする土笛を焼き、商のない鬺鍾に応じ、微ちのない四且に変化し、象を造り定まることなく、声と飲は元にかえず。文殊の「中・辺のない中」を知らば、子華子の「庭皇の中」を用いてもよいのだ。これを「全均」と名づけ、「無均」と名づけ、「真均」と名づけ。荘嚴な宮殿を建て、太古から現在まで鳴りひびく鐘をつくるだろうか。それはきつとこの造具の均と和調の均によって両端をひとつに合わせる方法を問うのだ。仏の応身・報身・法身をあらわす、印泥・印水・印空の三印は、ここではみなやぶれる。まるで削りカスのようにではないか。存あると泯ほろぶは同時で、たがいに壊れない。形が無形であれば、声もまた無声である。どうして形にあそび声にたわむれることができるのか。

二十五

蒙老望知者萬世猶旦暮、愚本無知、不望知也。蒼蒼先知之矣。三更日出、有大呼者曰、是何東西。此即萬世旦暮之霹靂也、請聽、

【注釈】○萬世旦暮、「萬世之後而一遇大聖、知其解者、是旦暮遇之也」(『莊子』齊物論)

【翻訳】知を望む蒙老そうろうには、万世は旦暮のようである。わたしはもともと無知なので、知を望まない。蒼天がまずこれを知っている。だが、夜中に太陽がのぼり、大声でさけぶ者がいる。「何が東西だ」と。これが即ち万世旦暮の雷鳴だ。どうか、聴いてほしい。

(『東西均』開章終)